

同窓会の軌跡

能代高校同窓会 十年の軌跡

平成七年九月二十二日（金）の創立七十年記念式典以降、同窓会活動は、同窓会総会、新年祝賀会とともに各支部活動がほぼ従来のとおり行われて来ました。各年度の講演会の内容を主に述べて十年の軌跡といたします。

◎平成七年度

七十周年記念式典が行われた年度なので新年祝賀会で同窓会総会が行なわれ、講演会は実施されませんでした。

◎平成八年度

〈講演会〉平成九年一月十一日（土）

於 金勇

講師 県生涯学習センター所長

鈴木元彦氏（二十五期）

演題 「雪中田植えと祈り」

◎平成九年度

〈講演会〉平成十年一月三十一日（土）

於 金勇

講師 日蓮宗本澄寺住職・能代病院勤務

柴田寛彦氏（三十七期）

演題 「生と死のはざま」

・同窓会会長神馬恒成氏（九期）平成九年度

をもって勇退。後任に

田中仁純氏（二十五

期）。同じく副会長大塚繁夫氏（十期）、

花下哲夫氏（十二期）共に退任。

◎平成十年度

〈講演会〉平成十一年一月三十日（土）

於 プラザ都

講師 弘前大学教授（人文学科）

五十嵐靖彦氏（三十期）

演題 「最近の社会情勢と大学環境」

◎平成十一年度

〈講演会〉平成十二年一月二十一日（金）

於 金勇

講師 秋田県立大学短期大学部教授

佐々木脩氏（三十七期）

演題 「ヒルは切られて痛いのか？」

◎平成十二年度

〈創立七十五周年記念講演会〉

平成十二年九月二十日（水）

於 能代市文化会館

講師 岩手県立大学長 西澤潤一氏

演題 「未見の我を発見せよ」

〈講演会〉平成十三年一月二十六日（金）

於 金勇

講師 元参議院議員・同窓会顧問

佐々木満氏（十五期）

演題 「半世紀前の日本」

◎平成十三年度

〈講演会〉平成十四年一月二十五日（金）

於 金勇

講師 元能代高校硬式野球部監督

太田 久氏（二十五期）

演題 「今想う高校野球」

◎平成十四年度

〈講演会〉平成十五年一月二十四日（金）

於 金勇

講師 シナリオライター

加藤正人氏（四十二期）

演題 「シナリオ創作の裏側」

◎平成十五年度

〈講演会〉平成十六年一月二十三日（金）

於 金勇

講師 テノール歌手

齋藤忠生氏（三十三期）

演題 「旅」

・能代高校同窓会支部 松陵津軽会 発足

前会長 堀内栄作氏（二十四期）

現会長 七戸 仁氏（四十七期）

事務局長 田口 彰氏（三十五期）

・新同窓会副会長 浅田嘉美氏（十七期）

平成十六年度から

◎平成十六年度

〈講演会〉平成十七年一月二十八日（金）

於 金勇

講師 みちのく銀行代表取締役頭取

原田和夫氏（二十六期）

演題 「ロシア石油・天然ガスビジネスの現状」



出席者全員で校歌を歌う



会議資料を熱心に見る

東京同窓会の軌跡

―能代高校同窓会の発展のために―

二十五期（新制七期）

東京同窓会会長 畠

豊彦

東京同窓会は、昭和三十二年頃から有志の集まりで活動を始め、いた同窓会東京支部の形が、昭和五十六年十月に開催した総会で「能代高校東京同窓会」と改称して新たに発足しました。それまでの副支部長の板倉創造さん（三期）が初代会長となり、支部長であった腰山巳代治さん（二期）が名誉会長になりました。平成三年十月の総会での役員改選では事務局長であった小林肇さん（十九期）が会長になられ、事務局長に八柳昭義さん（二十六期）が就任しました。（東京同窓会への改組の経緯については東京同窓会会報第十三号（平成十五年九月発行）の「東京同窓会創立の頃―小林顧問へのインタビュー」参照）そして、私が平成十一年十月総会で三代目の会長に選任され、八柳事務局長は引き続き平成十五年十月まで、十二年間の長きにわたりその任に当たられました。前二代の会長の功績は多大なものがありますが、八柳事務局長（現顧問）が前会長を補佐するとともに会員並びに幹事の増加、連絡網の拡充、在京秋田県高校同窓会連合会（秋高連）の活動等に努められた功績は甚大なものがあり、私達はこ

れら先人の築かれた遺産の上に立って運営をしております。

現在東京同窓会の会員は、約千四百名であり、毎年九月に会報発行、十月に総会・懇親会を開催しております。また、年間を通じて能代市の在京他校同窓会及び大館鳳鳴高、鷹巣農林高の在京同窓会との交流、並びに在京ふるさと会との交流を行っております。さらに毎年七月開催の秋高連総会には全県の四十余校が参加した懇親会が行われ、これらを通じて同窓会活動の情報交換と友好の輪を広げる機会となっています。

各同窓会の共通の課題である会員及び会費の増加を図るために東京同窓会も鋭意努力をしておりますが、中々目に見える効果が得られていないのが現状です。

平成十四年から活動の柱と方向性を明確にするため活動方針を掲げて活動しております。その中で、本校同窓会との連携強化の点から「同窓会本部・支部及び本部事務局との交流（総会・懇親会への相互参加等）の活性化」「ホームページ及び会報等を通じて、母校及び本部との情報交換を進める」ことを掲げております。特に、これからの情報化社会に対応して情報の共有化の推進が望まれます。

組織的には東京同窓会も支部の一つですが、本部同窓会の発展と各支部同窓会の発展は個別にできるものではなく連携を伴う相乗

東京同窓会創立の頃

小林顧問(株友和代表取締役会長)へのインタビュー

このほど顧問の小林肇氏に、能代高校同窓会東京支部創設の頃や能代高校東京同窓会への改組の経緯等について語っていただきました。小林顧問は非常にお元気で、大変熱心にお話し下さったのですが、紙幅の関係で詳細にお伝えできないことをお詫び申し上げます。

小林顧問「初めは東京支部だったのです。昭和51年10月に設立したんですが、能代高校が樽子山から今の高埕に移った後で、昭和50年に敷地内に「自在の塔」の除幕式があって、関係者が能代に出向いたとき、昭和梱包(株)という会社をやっていた後藤さんが声を出されたのです。実は、それ以前にも、私が20代後半の頃にも、集まりはあったんです。」

本紙「その頃にもあったんですか？」

小林顧問「そうそう。私なんか若い頃で、茗荷谷の茗溪会館で行われた会には時々出かけていたんです。しかし今の様に組織立ったものではなかったですね。それで後藤さんや旧制8期で北方領土問題で尽力されていた大山芳男さんや旧制1期で日立製作所にいた腰山巳代治さんなんかと話し合っ、支部長には、道路公団出身で当時はハイウェイトールシステム(株)にいた板倉創造さんがいいということになり、私が頼みに行きました。そうしたら板倉さんは大変乗り気になり、快く支部長を引き受けてくれたんです。」

本紙「それで創設の運びに…」

小林顧問「そう。それで支部長が板倉さん、副支部長が旧制12期の塚本淳悦さんと新制3期の柳谷洋さん、事務局長が私ということになって、昭和50年の暮れに立ち上げ、何回も準備会を開いて51年の10月2日に第1回の総会を開いたのです。」

本紙「その頃の会の方針は？」

小林顧問「板倉支部長という方は、今までの集まりと言え、ある意味では肩書きのある人の集まりだった。しかし、そうではない人にできるだけ多く集まってもらいたい。そうでないと同窓会の意味がない。それには会費は安く抑えるんだ、と言っていましたね。会長がそういう方針だから、色々工夫しました。会場を茗溪会館という日立系の会館にしたのも、日立の関係者がいたから出来たし、会館も随分協力してくれて、暫く後に感謝状を上げたこともあります。」

本紙「いつ、どうして“支部”から“東京同窓会”へ変わったのですか？」

小林顧問「これは会が軌道に乗った昭和56年のことで、私が強く主張したのです。本部である能代高校同窓会と対立するのではなく、本部と連携しつつ、しかも主体的に動くべきだと考えたからです。この考えは本部でも了解してくれて、むしろ積極的に支援してくれた。そのうえ、同窓会の会旗まで寄贈してくれたんですよ。」

本紙「運営についてどのようなお考えでしたか？」

小林顧問「自分の経験から、堅苦しさは極力避けるようにしました。儀式を短くして、講師を呼んで話させたり、ゲームをやったり…。同窓会と言うのは純粋な卒業生の集まりだから、皆、同等の権利があるんだ、というのが設立のときの最初の幹事会で私が力説したことでした。」

本紙「今日は貴重なお話をありがとうございました。」

効果の結果として期待されるものと考えます。同窓会活動の理想像は捉え難いとしても、普遍のものと変化する時代の流れの中で、確実に継続させていくべき使命を考えると、同窓生による自主的な運営をめざすべきであると思います。百周年を目指して同窓会会館を建設し、同窓生がボランティアで常駐する体制を作るくらいの大きな構想を抱いて進むことも肝要ではないかと思えます。

「県庁能高会」のあれこれ

三十五期(新制十七期)

県庁能高会会長 小野 公 生

その名を「県庁能高会」と呼ぶ。規約の制定施行は昭和三十年一月一日、昭和五十三年四月一日に一度一部改正がなされている。第一条に、「旧制能代中学校及び能代高等学校を卒業又は在学したことのある者で、秋田県庁及びその関係機関に勤務する者のうち、本会の目的に賛同する者をもって組織し、事務

所を本庁内におく」とある。歴史は昭和三十年にさかのぼり、イヤもつとつと古いのかも知れない。

会員の他に、本会会長等経験者や現職の県議会議員、市町村長からなる顧問の方々がいる。

ところで、平成十七年一月現在で会員数は、三十三期(昭和十九年四月二日生まれ以降)から七十四期(平成十六年四月一日生まれまで)まで、年齢の開きは四十一歳、合計二百五十二名である。

これを出身市町村別にざっと見る。能代市

百四十一名(五十七%)、二ツ井町三十名(十二%)、山本町十六名(六%)、八竜町十六名(六%)、琴丘町十三名(五%)、八森町十名(四%)、峰浜村八名(三%)、藤里町四名(二%)、岩崎村一名(〇・四%)、その他市町村十三名(五%)。能代市出身者が一番多いのだが、これは当たり前前で、能代山本の市町村別人口の割合と大体同じとなっている。岩崎村一名、これは筆者の在校時結構いたのでひろって見たが、やはりいた。

会の活動状況は、年二回の総会、新年会にその他の行事開催が中心だ。各行事等には、大勢の会員、それに顧問各位が集まって盛り上がる。また、母校の校長先生、同窓会本部の会長さん等などにも出席を御願いしている。会員相互の親睦と能代高等学校の隆盛を図ろうとするものだ。

最近のことでは、平成十六年二月九日に新年会、同じく七月二十三日に総会を開き、それぞれ懇親会を催している。ともに四、五十名は参加してくれる。母校からは阿部正博校長先生(新年会)、菊谷一校長先生(総会)、担当の松谷健先生等、田中仁純同窓会長、飯坂誠悦同副会長が駆けつけてくれ、近況やら、ホットなニュースを提供してくれた。酒席では、今では政界を引退した佐々木満顧問や現役の県会議員、市町村長各位等のご高説に耳を傾けながら、同僚とも打ち解けて杯を重ね

るといった具合で和やかに時が過ぎていく。

また、平成十五年六月二十日の総会時には、「中日ドラゴンズ山田久志監督を囲む会」を併せて開催した。チームの練習のため、少し遅れて会場に現れた同監督から「プロの厳しさ」の話を聞いたときは、思わず不断の日常と照らしあわせ快哉を叫んだものだ。同監督の抱負をじかに聞けて大好評だった。この時は、いつものメンバーの他に同窓会秋田支部、母校のPTA、松陵会(能代高校硬式野球部OB会)等にも参加を呼びかけ、百三十名近い人でにぎわった。

少し古い話だが、平成十二年の秋には、能代高校卒業生でバレーボール菅原貞敬先輩(昭和三十九年東京オリンピック出場)の「ケニヤ女子バレーボールチームのための義捐金募集活動」にも会をあげて取り組んだ。会の特別事業として位置付け、卒業生以外の方々にも広く呼びかけた結果、少なくない額のお金を集め、菅原先輩に差し上げたこともあった。当時話題となっていた「国際貢献」の観点での参加だった。募金活動といえば、母校の平成四年の「甲子園出場」以来の出来事であった。

さて、「甲子園」のことだ。会員のほとんどが出場を熱望している。昭和三十八年の能代高校が一回目の出場した時の高校三年生が昭和二十年生まれ。母校の創立八十周年記念

となる平成十七年には六十歳を迎える。その期の人に言わせれば、「オレが退職するまでには何とかならないのかな。」というのが口癖のようである。

甲子園出場には、何故か十四年ぶりというのが目立つ。昭和三十八年簾内政雄投手らの初出場の次が高松直志投手らの昭和五十二年、高松投手が二年連続出場で、その次が、成田昇投手らの平成四年となる。というわけで十四年というのがキーワード。平成四年から十四年経過は、平成十八年、そろそろである。いつまでも、夏の甲子園県予選の一、二回戦での敗退、春、秋の全県大会手前の県北大会での敗退を続けるとどうなるのか。

全県的にみて、秋田市地区が優位だとしても、県南地区勢の活躍、ましてや昭和三十八年初出場以前の力関係を考えてみるならば、もう少しどうかなって欲しいのだ。会の開催に駆けつけて下さった校長先生が母校の近況報告として、進学状況等について、語ってくれたとしても、会員の最も知りたいのは、「今年甲子園に行けるのか。」「今年には行けなくても、どんな魅力のあるチームなのか。」なのだ。

「県庁能高会」は、母校とともに永久に不滅である。